

## 「くるみの家の歩み そして巣立ち」

くるみの家が開所したのは、今から七年半前の平成十五年十月一日、最初は高校3年生の女兒と専門学校生の女兒2名を連れて生活がスタート、小学校の3名については転校することになり通いなれた西百舌鳥小学校での行事が終わつてからということで十月十二日からみんなが揃い、初日からいた女兒2名と小学校3年生の女兒、小学校5年生の男児2名、中学1年生の男児の計6名と職員的生活がスタートしました。

くるみの家に来て最初のうちは不安があったものの年長の女兒は、いつでもテレビを見ることができ、部屋が静かで広くなったと特別寂しがることはありませんでした、しかし、中学生の男児にとっては不安だらけで、決まりを作りた、時間を決めてほしいと落ち着きが無く、立ったまま宿題をし、夜遅くになってから部屋の模様替えを始める、部屋のあちこちに張り紙をする、周りの子どもも近寄りにくく避けていた時期もありました。小学生は学校も新しく友達も

無く不安で（すぐに友達は出来るが）、今までならいつでも誰かが側に居ていつでも遊べていたのに人が少なすぎて遊べない、静か過ぎて嫌だ、グランドが無いから遊べない、「寮に帰りたい。」と夜になると布団の中で泣いて、遊ぶ人数が少ないと面白くないから遊びたくないの家の中から出ようとしなかった時期もありました。子どもだけではなく職員も不安を抱えての始まりで、どうすれば子どもたちが淋しくないだろうか、くるみの家をどんな家にしていこう、子どもたちとの関係をどうやっていこうと頭を悩ませる毎日でした。周りの多くの人に支えてもらいながら子どもと一緒に買物をして食事を作り、少しずつ仲間意識がはぐくまれていきました、「本当の家族じゃないけど家族旅行したいな。」「おうちに帰つてから…しよう。」「本当の家族じゃないのにどうして家族のよいうな生活をしないといけないの。」友達を連れてきて部屋の中で大暴れ、注意をすると「お母さんが怖い家だと思われるから怒らないでほしい。」家主さんの駐車場でボール遊びをしてサイドミラーを壊し子どもが謝りに来なかったと後で聞

かされて平謝り、今思えば笑えるようなことでも当時はどうすることも出来ず悩んだり落ち込んだり毎日でした。

くるみの家が動き出し7年半、この間に7名の子どもたちが巣立っていきました。お母さんとして子育てを頑張っている子ども仕事がんばっている子ども、それぞれの人生を自分の足で歩き出しています。今年の3月にも男の子2人が巣立っていきました。この子とはよく話をしましたが意見がかみ合わずしばしばけんかになることも。台所に来て話をし、ため息をついては「買物ついて行こうか?」と買物の荷物もちをして話をしたこと、くるみの子どもたちと共に泣いたり笑ったり怒ったり、いろいろな話をして今のくるみの家の形が出来上がりました、その子たちが巣立ちを向かえ、淋しいというのか嬉しいと言うのか、ただ淋しいだけでなく、また遅くなって帰ってきてくれることを楽しみに送り出しました。「くるみの家はいつまでもあなたたちの家だよ、いつでも帰っておいで待ってるね。」と。

(木村)

